

## 王安石の「性命之理」の思想—「窮理尽性以至於命」を中心に

田村有見恵

従来、王安石の思想については、法、制度、『三経義』、『字説』、「道德性命」、「窮理」、「理」、「神」等、様々な視角から研究されてきた。また、北宋の共通の議論としては土田健次郎氏、余英時氏等によって「性命」が指摘されている。これらの研究を踏まえた上で、筆者は王学と道学（反王学）との共通の議論として「性命之理」、「窮理尽性以至於命」の解釈を中心に考察する。

王安石の「性命之理」の説が北宋で共有されていたことについては陳植鏗氏の指摘がある。また、王安石の「尽性」に関しては賀麟氏、土田氏、「窮理」に関しては小島毅氏、「窮理尽性」に関しては李祥俊氏等に論及が見える。なかでも王安石の「理」の個別性については、陳氏、土田氏、尹志華氏等によって指摘されている。しかしながら、その道学と対立した王安石の「性命之理」の説がどのような思想であったのかについては研究の余地が残されている。筆者は博士論文において、王安石の「性命之理、其遠且異也。」（『宋文選』一〇「性命論」）に着目し、「性命之理」、「窮理尽性以至於命」の思想は「性」の「理」を「命」の「理」に一致させることを求める説であったことを指摘した。その際、その対立者として、司馬光の「心」の思想、二程、二蘇、張載、邵雍等の「理一」、「一理」、「性一」や、楊時の王安石の説に対する批判である「性命初無二理」（『龜山先生語録』三）という主張を根拠として挙げたが、反王学者の描述した王安石の「性命之理」の思想が、王安石の主旨と一致するものであるのか否かについてはさらなる検討を要する。

そのため、本発表では王安石の「性命之理」、「窮理尽性以至於命」の概念、王雱の「性命之理」の説との差異点、王学者とされる曾鞏、呂惠卿、陸佃等の説の考察を通して、道学の淵源と深く関係する王安石の思想の検討を試みる。